

かぎろひの春まだ寒く君死にて小草かれゆく
冬は來むかふ

ひとりしてのぼり來れる墓どころ心しづめて
友をおもはむ

霜いたくおきし小草を踏みつつぞ心を遣らむ
寂しかれども

あかつきより師團の兵はうごきしとおもひつ
つ居りこの丘のへに

山がひの平をつたふ地ひびきをかすかに感じ
岡の上に居り

日あたりのよき丘のべは春のごと青々として
もゆる草あり

機關銃の音もこだますみづうみを甲よろへる山の
 かげより聞こゆ

われひとり歩みきたれる山かげに霜の白きを
 かむる草々

墓のべにあららぎの木を植ゑむとて涙をなが
 し語る友はや

霜

信しな濃の路ぢはあかつきのみち車おほ前は草こも黄き色いろになり
 て霜がれにけり

朝づく日のほるころしも繭まゆ倉ぐらのしろきを見れ
 ば旅はしづけし

山々にうづの光はさしながら天龍川よ雲たち
わたる

國の秀を我ゆきしかばひむがしの二つの山に
雪ふりにけり

寒水に幾千といふ鯉の子のひそむを見つつ心
なごまむ

みすすかる信濃の國は車前草もうらがれにけ
り霜をかむりて

やま峽の道にひびけり馬車は秋刀魚をつみて
日ねもすとほる

ここに見る赤石白根の山脈は南のかたに低く
なりつも

桑の葉に霜の解くるを見たりけりまたたくひ
まと思はざらめや

ぬばたまの夜明けわたれる野の道に青き小草
や霜がくれつつ

むかうより瀬のしらなみの激ちくる天龍川に
おりたちにはけり

道芝の霜をいたしと思ほえて光あたらぬとこ
ろ歩みつ

霜ふれる野のほそ川に青々と藻のゆらぐさへ
かなしきものを

みすすかる信濃の國や峽とほく日は入りゆき
てなごりの光

信濃數日

道のべの水のながれに溜りにし柿の落葉をわ
れは見て居り

わが友は幾度かここを通りけむ高木の道をあ
へぎてのぼる

わが友のいのちをはりしこの村の公孫樹はす
でに落ちつくしたり

しづかなる朝にもあるかみづうみに冬の靄こ
そたなびきにけれ

霜いたく降りたる朝の丘のうへ竹村のなかに
水たぎちつつ

うらがれし道の小草にあはあはと入日の光い
 まだ差し居り

そのかみに織田の軍よりやぶられし城あんど
 ころ霜がれにけり

あまづたふ日の入りゆけば涯とほき北空にし
 て濁るいろはや

高 遠

十一月八日信濃國高遠町に繪島の墓を弔ふ。

あはれなる流されびとの手弱女は媼となりて
 ここに果てにし

みすずかる信濃の國の高遠たかとほにかなしき墓を吾
も見つるかも

信濃路しなのぢに霜のいたきを我は見し柿の落葉にも
栗の落葉にも

みすずかる信濃のくにの高遠たかとほに一夜ひとよねむりて
霜しもをあはれむ

童馬漫吟

九月廿五日土屋文明ぬしと鶴沼に澄江堂主人を訪ふ。夜ふけて主人は「安ともらひの蓮のあけぼの」といふ古川柳の事などを語りぬ。

相見つつうれしけれどもこの濱に心ほそりて
君はありとふ

こもごもにもものいひながら松原まつばらの空家あきやのなか
にわれら入りゆく

ひんがしの相模さがみの海にながれ入る小さき川を
渡りけるかも

煉乳れんじゆの罐くわんのあきがら棄ててある道おそろしと
君ぞいひつる

うつそみの世はきびしけれ心こころ足りて濱はまに遊ば
む我われならなくに

庭前の冬おのづからふかむ

晝ながら悲しかりとふ心にぞ黄なる落葉に照
れる日のいろ

日もすがら夜すがら落ちし公孫樹葉はこがらし吹きてここにたまりぬ

さいはひの如何なる人か和毛なすやさしき妻と相ともに寝る

冬の夜は音なかりけりさ夜ふけとふけゆくときに土氷らむか

この日ごろ

ゆふまぐれくろくなりたる灰に降る時雨の雨はさむくもあるか

あわただしき世に生くれども心しづめて紙帳にこもる冬になりたり

この日ごろ人を厭はむ思あり火鉢の燬を吹き
おこし居り

わがこころに障らふものもなかりけり更くる
夜なかに炭を割りたり

日もすがら落ちてたまれる公孫樹葉はさ夜ふ
けにして音もこそせね

この夜ごろ眠りがたし

しろがねも黄金も欲しとおもふなよ胸のとど
ろきを今しづめつつ

うつそみの吾を救ひてあはれあはれ十萬圓を
貸すひとなきか

たまきはる命をはりし後世のちのよに砂すなに生うまれて我は
居るべし

奉悼歌

大正十五年十二月二十五日今上天皇(大正天皇)崩御あらせたまふ。

ふゆのいかづちのとどろけるさ夜なかにわが
大王おほきみは息いきたえたまふ

おほきみのつひの御みいのち白雪しらゆきは天の原より
ながらふるなり

かすかなる臣おみのわれより三みつおほき御齡おんよほひなりし
ことしぬびたてまつる

あかねさす日は照らせれどくにたみのなげき
きはまりてくらきがごとし

み民らはつどひ額ふしあめつちのくらきがな
かにたどき知らずも

大王のつひの行幸^{みゆき}やきさらぎのこほれる道の
おとぞかなしき

かがり火は寒きちまたに燃ゆれどもこよひの
行幸^{みゆき}かへりたまはず

きさらぎの氷れる道をきしりゆく御柩ぐるま
のおとは遠そく

昭和二年

昭和二年歳旦頌

しみとほるあかときみづにうつせみの眼まなこあら
ひて年ほがむとす

いなびかり光るごとしと歎なげきつついひし聖ひじりの
ことのかなしさ

くぐもりのさ霧がうへに寂かなる光てるごとく
くあらしめたまへ

山房小歌

金澤治右衛門八十歳賀歌

伯父ちちのきみはめでたやめでた高山たかやまの年ふること
とくいとくいのちながしも

伊東浴泉一首

冬がれし山のうへより波だてるひむがし伊豆いづ
の海を見おろす

生業

狂人^{ものぐるひ}まもる生業^{なりはひ}をわれ爲^すれどかりそめごとと
人^{ひと}なおもひそ

平福一郎君、久保田周介君高等學校に入學す。

食^たひしものおのづからこなれゆくごとくつづ
けざまにも吉報^{ききう}をきく

五月七日 一首

ぬばたまの夜^{よる}にならむとするときに向ひの丘
に雷^{らい}ちかづきぬ

浅草寺参詣

ひとときの心しづめむたどきさへなかりしわ
れと豈おもはめや

陸奥の山のみづ

みちのくの山のみづさへ常つねならぬいたいたし
き世にわれ老いむとす

夜ふけて紙屑籠かみくわだにのぼりゐる蟻をし見ればう
ら和なごましむ

いのち死にし友をぞおもふこのゆふべは鱒どぢやうを
買ひてひとりし食はむ

伊東浴泉雜歌の中

さびしとは分わきておもはねど冬がれし山より
水のながるるを見つ

伊豆の海にただにせまれる山のべのさむらき泉
に小鳥来て居り

見おろせるくろがねいろの伊豆のうみに西ふ
きあげて波たちわたる

冬ふゆの夜よふけわたりつつしほはゆ鹹しほく湧わきいづる湯はな
がれてやまず

かすかなる湯のにほひする細川うろくつに鱗うろこのむれ見
ゆるゆふまぐれ

春のはだれ

熱いでてわれ臥じにけり夜もすがら音してぞ
降る三月のあめ

晝すぎより吹雪となりぬ直ぐ消えむ春の斑雪
とおもほゆれども

とどこほるいのちは寂しこのゆふべ粥をすす
りて汗いでにけり

をさなごは吾が病み臥せる枕べの蜜柑を持ち
て逃げ行かむとす

わが身より熱おちそめしとぞおもふ生あたた
かき風をし聞けば

葦

南かせ吹き居るときに青々と灰のなかより葦
萌えにけり

雨かせのはげしき夜にめざめつつ病院のこと
氣にかかり居り

百鳥のさへづりかはす山なかにおのづからに
して死ぬるけだもの

はやりかせにかかり臥ればわれの食ふ蜜柑も
苦しあはれ寂しき

熱おちてひとりこやれば口ひげの白くなれる
をつまみつつ居り

雨

生業なりはひはいとまさへなしものぐるひのことをぞ
おもふ寝てもさめても

おのづから年としを経へにつつうち解とけて交はる人
は少くなりぬ

狂院きやういんに寝つかれずして吾居れば現身うつしみのことを
しまし思へり

むらがれる蛙かはづのこゑす夜ふけて狂院きやういんにねむら
ざる人は居りつつ

うちわたす麥の畑はたけのむかうより蛙かはづのこゑはひ
びきて聞こゆ

あをあをとむらがりながら萌えて居る藜あかさのう
へに雨ふりにけり

さみだれは寂しくもあるかいそがしくあり經へ
し吾を籠こもらしむなり

ものぐるひを守る生業なりはいのものづかれきはまり
につつ心やすけし

童馬山房折々

業餘の吟

いささかのつとめなすにも額ひたひより汗わきいづ
るころとなりつも

はだれ雪あはれに降りし日ごろより心つかれ
て明暮れにけり

夏草のしげみに立ちて吾おもふ心あわただし
きのふも今日も

はりつめし心ゆるまむ時のまの遊をさへやこ
の日ごろせず

いなびかりひくく光るをいとけなき女の童子
に見しめたりけり

ものぐるひの命終るをみとめ來てあはれ久し
ぶりに珈琲を飲む

をさなごの物いふきけばあはれなる言もいひ
けりひとり遊びて

澄江堂の主をとむらふ

夜よるふけてねむり死なむとせし君の心はつひに
氷こほりのごとし

壁かべに来て草かげろふはすがり居り透すきとほり
たる羽はねのかなしさ

やうやくに老いづくわれや八月はちがつの蒸むしくる部
屋に生きのこり居り

第四回安居會

自八月二日至八月六日於永平寺

あかつきに群れ鳴く蟬のこゑ聞けば山のみ寺
に父ぞ戀こほしき

古泉千樞君を弔ふ

よろこびて歩あきしこともありたりし肉じ太ごの師し
のみぎりひだりに

息たえし師しのまくらべにいそぎ來たて携たづはりけ
ることをおもはむ

うつつにし言ひたきこともありしかど吾より
先さにいのち死しにゆく

子規忌歌會

九月十七日於
田端大龍寺

秋こづきし庭のおもてにさす光こころしづけし
苔おも落ち葉ばも

大龍寺即事 二首

しづかなる庭に午後の日さしをりて楓つぎの落葉おちば
は片よりにけり

寺なかのともりし白き電燈に蝸螂かまきりとべり羽はねを
ひろげて

庭前 二首

しぐれこし吾が廢園あれそのの帚はきぐさ赤らみにけりか
たむきながら

むらがりて庭に衰ふるあら草にさ霧は白しい
で立ちみれば

赤彦忌 十月十六日 豊平村 寄稿

みまかりし友を偲びにゆか
んころ信濃の山は
色づきぬべし

上林温泉歌會 一首

秋さむくなりまさりつつ
旅を來て北信濃路に
鯉こくを食ふ

悼芥川氏 一首

むしあつくふけわたりたる
さ夜なかのねむり
につぎし死をおもはむ

永平寺吟

アララギ第四回安居會

心たぬしも
大きおほ聖ひじりいましし山ゆながれくる水ゆたかにて

海をわたりて聖ひじりが負ひし笈おひ見れば尊たふとくもある
かあはれ尊たふとし

もろともにここに明暮るる大衆の淋汗しみあせの日に
われもこもれり

あしびきの山のはざまに白雲しらくものうごくがごと
く人は住みけり

朝よひにおしいただきて食む飯は鱗の香ぞな
かりけるかな

大佛寺途上

ひんがしにむかひいくたびか踏みわたる谷川
の香は親しくもあるか

ひるながら人のおとせぬ山なかに入りて來に
けり百鳥ぞ啼く

うつせみの苦しみ歎くころさへはやあはあ
はし山のみ寺に

谷間はいまだ源に遠からし山みづの音のこも
るを聞けば

葛の花ここにも咲きて人里のもの戀しき心
おこらす

夏山のみちをうづめてしげりける車前草ぞ踏
む心たらひて

玲瓏巖

いにしへの聖はこひし山中のここに明暮れし
ことぞこひしき

大き聖この山なかの岩にゐて腹へりしときに
下りゆきけむか

谷に生ふる高杉の秀のゆらぎをぞかく目ぢか
くに見るは樂しき

谷川の音たえまなきあかつきにいにしへびと
 ぞここに居りける

蟻地獄砂にこもりてゐるを見つかりそめのご
 と見てか過ぎなむ

この巖より滲みいづる水かすかにて苔の雫と
 なりがてなくに

杉の秀のうごくを見つついにしへの聖のあと
 に吾ぞ居りける

きぞの夜にねむり足らはず覺めしかばこの岩
 のはざまにまどろみにけり

志比川の谷の入さへ白雪のふりつむころに道
 絶えぬべし

冬ふかみ志比谷川の奥谷に夜半はしづかに雪
つもるべし

門外・歸途

額のぐらき承陽殿のあかつきに石のたたみに
額を伏したり

晝すぎし龍門外にわれは来て氷水をばむさぼ
りて飲む

山なかの畑を見ればきなくさき煙を立てて燃
えをるものよ

おくつきを清めに行くと脚絆をはきし少女の
尼を見ればまがなし

門外もんぐわいの極樂橋のほとりにて少女をとめの尼と今か別
れむ

永平寺漫吟補遺

あかつきの光はつかに差しそめし木立こだちが梢うれに
夜の鳥ぞ啼く

夏ふけし山のみ寺の杉むらに朝雨あさあめふるを見て
立つわれは

志比川しひがはの谷を入り來てうらやすし杉生すぎぶのなか
の落葉おちばを見れば

ながれあふ谷間たにまのみづはあるときにしぶきを
あげて此處にあふれぬ

しづかなるこの谷合たにあひに青々あをと稻田いなだいくつかあ
るも親したしき

道のべにどくだみの花かすかにて咲きゐるこ
とをわれは忘れず

山はたけがひの畑はたけにひとりの女子をみなごは布ぬのを燃もやしぬ蟆がと子と
の來こぬがに

十國峠

ひがしかせ吹きしくなべにここよりぞ天城あまぎの
山はおほにくもれる

小鴉こがらすは茅ちがやすれずれに飛び交かへり海をぞよ
ろふ峠とがのうへに

ひと乗りてけふの朝明に駿河よりのぼり來し
馬か山に草はむ

うちきらひ駿河の海は見えながらここより遠
き甲斐が峯くもる

音立てて茅がやなびける山のうへに秋の彼岸
のひかり差し居り

青山墓地

をさな兒のきほひ遊べるこゑはしてこの墓原
も野分すぎにし

こまかき蚊むらがりくれば我足の靴下のうへ
より刺せりその蚊はや

百日紅さきのこりけるをあはれみて墓のあひ
だをもとほりにけり

ならび立つ墓石のひまにマリガレツといふ少
女の墓も心ひきたり

雨はれて秋の日のさす墓原を今しよこざり行
きし靴おと

しばしだに墓原くれば遊びありくひとの如く
に心なごめる

戦に果てにしチエツコスロワキアの兵士の墓
も見て過ぎむとす

かりがねの來鳴かむころをわれひとり墓地の
草生に疲れつつ居り

信濃行其一

くらがりをいでたる谷の細川は日向ひなたのところ
を流れ居をりにき

遠山とほやまは雪ふれるときつゆじもに濡れしもろ草
わけつつぞゆく

あたらしき馬糞まぐそがありて朝あさけより日のくるる
まで踏むものもなし

はざまより空そらにひびかふ日すがらにわれは寂
しる鳴澤なるさわのおと

こがらしのしきりてぞ吹く晝ひるつかた黒姫山に
ただに對へり

うちひさす都みやこをいでて山川やまがはのさやけき國をわ
れ行かむとす

湯のいづるはざまの家いへにふりさけし五いつの山
は皆晴れにけり

いろづきて夕日に映ゆる山もとの湯いづる里
にわれは近づく

信濃行 其二

稻を扱かく器械きの音おとはやむひまの無くぞ聞こゆ
る丘のかげより

ひたひより汗はにじみてしばしだに山を歩あゆむ
はたのしかりけれ

山ふかき杉生すげのなかにおちたまる杉の落葉は
 いまだひろはず

晝しぐれの音おとも寂しきことありて日ましに山
 は赤くなるべし

山がひの空つたふ日よあるときは杉の根方ま
 で光さしきぬ

とどろける谿のみなかみにあはれなる砂川すなみ
 むと常におもはず

谷あひの杉むら照らす秋の日はかの川しもに
 落ちゆくらむか

奥谷の川原の砂に香にたちてあらし山みづ湧
 くところあり

信濃行 其三

たどりこしこの奥谷おくだにに家ありて賣れる粽ちまきはま
だあたたかし

わが友は語りつつゆくトロッコにて二匹の牛
の死にけることを

湯の宿に一夜ねむりし朝めざめまたたびの實
の鹽漬を食ふ

三年みつとせまへ秋ぐちにして洪水こうずいのあらしし川原よ
こざりにけり

たざりつつ湧きいづる湯にしの竹の青々とせ
しを束つかねしづめぬ

湯田中の川原に立てば北側ははつかに白し妙
高の山

石原の湧きいでし湯に鯉飼へり小さき鯉はこ
こに育たむ

ひとむきに泳げる鯉はわきいでしなまぬるき
湯に育ちけるかも

天龍川 其一

昭和二年晩秋講演をへてのち天龍峽にあそぶ。

ぬばたまの夜のあけがたの霜ぐもる國の平は
川の音ぞする

信濃路や天のなか川に立つ波の寒きひびきを
間近くに聞く

峽すぎて見えわたたりたる石原に川風さむし日
は照れれども

きのふまで時雨の雨のふりしとふ天龍川を漕
ぎくだりゆく

冬日てれる天龍川の川舟にしまらく吾の言ぞ
たえたる

信濃なる天龍川のたぎちゆく寒きひびきの常
ならなくに

あしびきの山峽ひくく流るるときしぶきをあ
げて川波立てり

天龍川 其二

きはまりて晴れわたりたる冬の日の天龍川に
たてる白波

雨はれて寒きかせ吹く山がはの常なき瀬々の
音ぞきこゆる

山がひの天のなか川漕ぎくだりて川瀬をひる
み波たちわたる

天龍川の中つ瀬にして浪だてりしぶきはかか
るわが額まで

ひた晴れに澄みきはまれる冬空やきのふまで
こそ時雨ふりしか

奥やまの秀ほには真白く雪ふりて駒こまが根ねつづきの
ひまに見えそむ

天龍をこぎくだりゆく舟ありて淀ゆきしかば
水の香ぞする

おのづからなりのまにまにとどろきて奇くしき
山やま水みづやうまし山がは

南みなみへながるる川を漕ぎ來つる舟は走れりたぎ
つ瀬ごとに

ゆふがれひ食ひつつ居れば川波の寒きひびき
はここに聞こゆる

天龍のいく激たぎつ瀬をくだり來て泡あわだつみづを
見れど飽かずも

妙高温泉 其一

さむざむと時雨は晴れて妙高の裾野をとほく
紅葉うつろふ 土屋文明君同行

起伏は北へのびつつわたつみの海よりおこる
山ひとつ見ず

道草のうごくを見れば妙高の山をおろしてこ
がらし吹きぬ

もみぢばもうつろふころか山ひだに屯せる雲
うごきそめつつ

北空のけむりのごとき涯まで越後の國に山は
起伏す

妙高温泉 其二

ゆき降れる襞ひだも見えつつ今しまし山のうつろ
に雲うごくらし

妙高の裾野のなだり音ぞして木枯こがらしのかせひく
く過ぎつもの

まちかくに直ただにいむかふ黒姫くろひめや山は樂たのしと言
はざらめやもの

しぐれの雨あさまだきより晴れをりて北國街ほくごくかい
道みちふくかせ寒し

むらぎもの心しづけし雲はれて入日にかげり
黒姫山は

しぐれ降るころとぞ日和さだめなき越後の山
 に一夜ねにけり

朴の葉の青きを見れば心あやし紅葉すがれし
 山なかにして

鹽づけにしたる茸を友として食へばあしびき
 の山の香ぞする

晩秋

かたばみの青々とせし葉をぞ見る廢れし園に
 霜ふりしかど

うらがれて白くなりたる古草に新草まじり生
 ふるさへ見む

郊外の家の庭には唐辛子をむしろのうへにも
り上げて干す

けふ一日つめたき雨は群立ちてすがれそめに
し雑草に降る

ちちの葉の黄にみだりつつ散りぬるを心にと
めむ人さへもなし

業をへし労働者の入りてゆく日比谷の園にし
ぐれふる見ゆ

今ふりし時雨とおもふにさむざむとアスファ
ルト道の泥をながせり

一人してしばしあゆまむ公園に時雨は降りぬ
橡の落葉ふかく

業餘の吟

庭隈の苔をぬらして朝よりしぐれの雨は降り
にけるかも

亡き友のなきを悲しみ信濃路のみ寺のなかに
一日こもりぬ

かりがねは夕空たかく飛び行けりいづらの里
に落つるにやあらむ

秋萩のうつろふ見ればこの庭のなべての草に
照る月もがも

しみじみと見しは幾年ぶりならむむらがり匂
ふ菊のとりどり

菊花大會三首

白菊しらぎくのもりあがりたる花はな瓣びらは心しづかに見る
べかりけり

くれなるに群むらがり咲ける小こ花はなさへ菊はかなし
きものとぞおもふ

老おいにむかふ命いのちかすかに生いくれども何なににおそれ
て明暮あきくれにけむ

月つき讀よみのいまだ出でざる宵よひ闇やみにわれの立ちにし
庭のうへのつゆ

つらなめて空そらにひびける飛行機は向むきをかへし
と思ひつつ居り

木曾やまに啼なきけむ鳥をこのあしたあぶりて
ぞ食いふ命いのち延のちぶるがに

いとまなき吾なりながら冬ふけし信濃の國の
河さかのぼる

朝あけし厠かはやのなかになておもふけふのゆふべ
は何を食はむか

みすすかる信濃の友のたまはりし紙に澁しづぬり
ぬ日向ひなたにいでて

わが庭のいまだ枯れざる小草せうそうにはつゆじもし
げし空晴れしかば

血すぢひきし人ひとの世事よごとに苦しめる備後びんごのくに
の友をぞおもふ

この日頃

けならべてあわただしくも暮れゆけど心さび
しき事ことありにけれ

ゆふぐれし机つくえのまへにひとり居りて鰻うなぎを食ふ
は樂たのしかりけり

いちはやくうらがれそめし草なかにけふも日
もすがら小鳥のこゑす

つゆじもはしとしとしてしげけれど日ひ毎ごとに
し見むわれならなくに

うらがれて白くなりたる草叢くさむらにかくろふ鳥は
心やすきか

北窓きたまどに目張めばりをしつつこの冬を心しづかに我われあ
りぬべし

うつしみの吾が目
のまへに黄いろなる公孫樹
の落葉かざり知られず

ももくさにけふのあさけのつゆじもは時雨の
雨のふれるがごとし

北びさし音するばかり吹くかせの寒きゆふべ
にわれ黙しをり

雑歌

長塚節忌歌會 二月二十七日

きさらぎに降りたる斑雪すでによごれ消のこ
る見れば君し偲ばゆ

うららかに

(雑誌キング四月號のために)

低山の雪は消えつつ日もすがらかざろひの立つ國を吾れゆく

雪げ水谿にみなざりとどろけるみちのく山にうぐひす啼くも

さわらびの萌えいづる野にわれひとりけふも
來にけり鎌をもちつつ

四月土岐善磨ぬしの洋行を祝して

われかつて心をこめて見入りけむドナウの河
を君も見るべし

子規忌歌會

九月十七日

常臥とどがしの痛し痛しと苦しみて泣きたる人は竹たけの
里さと人びと

昭和三年

し南の沖にありとふ
けさ揺りし地震のみなもと
は金華山のひむが

て來にけり
一月の二日のゆふべ物戀し
き心をもちて出で

折に觸れつつ

つかれつつ寝ざむるものか寒にいりてなまあ
 たたかき夜にももの音もなし

よるふけし街の十字にしたたかに吐きたるも
 の氷りけるかも

墓地の木にすくふ鴉かむらがりて我がいへの
 鶏おそふことあり

自動車のわだちが附きて日もすがらこほれる
 泥は五日あまり経ぬ

うつし身は現身ゆゑになげきつとおもふゆふ
 べに降る寒のあめ

あわただしく起臥すわれに露の臺くふべくな
 りぬ小さけれど

雪のうへに二月なかばに降る雨のしき降ると
きに心いらだたし

はやりかせ癒えかかりつつ冬の夜の冴えたる
月の光をぞ見し

一夜あけばものぐるひらの疥癬に薬のあぶら
われは塗るべし

近時

釜山なるひとりの友を夢に見つ夜ふけてより
ねむりたりしに

わが庭に來る鴉のくちはしに綿をくはへて
飛べるは寂し

をさなごは「なるほど」といふ言おぼえて朝な
夕なにしきりに使ふ

うるはしきをみな女なりしと聞きしかど相見むこと
もなかりけるかな

うちかへす古綿ふるわたを日にほしけるに鴉ふたつが
おり立つあはれ

浅草をりをり

観音のいきいらかの北がはは雪ははつかに消
え残りけり

人だかりのなかにまじはりうつせみの命いのちのゆ
ゑのせつぽう説法を聴く

浅草のきさらぎ寒きゆふまぐれ石燈籠にねむ
る雞あり

川蒸氣久しぶりなるおもひにてあぶらの浮け
る水を見て居り

みちのくより稀々まれまれに来るわが友と観音堂に雨
やどりせり

この日ごろ

けならべて體からだの無理をとほせりとおもひて夜
半にかへり來にけり

哀草果のおもてほてりてみちのくの農村のうそんのこ
とを吾に語りぬ

この日ごろはやれる天然疱瘡は支那の國より
わたり來りき

あづさゆみ春ふけがたになりぬればみじかき
蕨朝わらびあさな朝あさな食ふ

日曜の朝あさ寢いをすれば節々ぶぶは痛むがごとし疲つれ
けるらし

折に觸れて

難破船なんぱせんより救はれたりし人なかにミングとい
へる犬が居りたり

きさらぎはそこはかたなく過ぎ行けりわが北きた
窓まどのべに砂たまりつつ

現身うつしみのわれ死ぬるとき氣味きみよしとおもはむ人
は幾いくたり居ゐむか

わがいのち絶えゆくことを喜よろこばむ人のころ
は *sadisme* サヂスム に似にむ

みちのくを我はおもへりこの夜ごろ雪ふりつ
もる山がはのべを

青 根

岩代にむかへる山の起おき伏ふしは青々として此こ處こよ
はるけし

しげやまのうへにまぢかく見えてをる藏王ざわうの
山は雷らいなりわたる

春ふけて最上^{もがみ}だひらの女^{をみな}らもこの温泉^{いづ}にう
たをうたへり

消^けのこりし雪のはだれはみちのくの藏王^{ざうおう}の山
にけふも見るべし

雪きゆる藏王^{ざうおう}谿^{たに}よりながれ来て川遠^{とほ}じろし見
おろしにけり

C 病棟

郊外の病院に来て夜^{よる}ふけぬ田^たゐの蛙^{かはづ}のこゑ減
りにけり

水に住むこまかき蟲は病棟^{びやうとう}のたかき燈^{あかり}にしば
し群れける

おしなべてつひに貧しく生きたりしものぐる
ひ等はここに起臥す

むらぎもの心ぐるひしひと守りてありのまに
まにこの世は経べし

さみだれの暗く降りしくきのふけふ心はりつ
めて事にしたがふ

業餘小吟

かすかなる燈とぼりて飛行機は梅雨の晴れし
夜空に飛べり

現世を憤るとにはあらねどもこの日ごろわれ
夜半に眠らず

みすずかる信濃のくにの山がひに聲こゑさやさや
し飛ぶほととぎす

時のまの心あやしもむくむくとたたみ疊うごきて地な
震みしづまりぬ

漸くに老いづく吾やあるはずみにアルプの山
を思ふことあり

五月きみだ雨れの雨の晴れたる夕まぐれうなぎを食ひ
に街まちにいで來し

はりつめし吾の心を歌よみにうつつぬ抜かすと
人なおもひそ

ゆふぐれの光に鰻の飯いひはみて病院のことしば
しおもへる

仙臺

みちのくに來しとおもへば樂しかりこよひし
づかに吾はねむらむ 阿部次郎教授宅

さ夜ふけと更けわたるころ海草のうかべる風
呂にあたたまりけり

朝がれひ君とむかひてみちのくの山の蕨を食
へばたのしも

わがこころ和ぎつつゐたり川の瀬の音たえま
なき君が家居に

いとまなき吾なりしかどみちのくの仙臺に來
て友にあへるはや

三山参拜の歌

昭和三年七月二十八日午後九時三十分上野驛をいで立つ。二十九日朝上山驛にて高橋四郎兵衛、同重男と落合ひ同車しつ。羽前高松驛下車。高松より海味かいしを経て、午前十時五十分本堂寺著。此間一部乗合自動車。それより徒歩にて午後四時志津著、投宿。本堂寺も志津も、明治二十九年（予十五歳）、父に連れられて宿りし處なるが、今は参拜者も少く、なべて境界ひそかなり。

志

津

七月二十九日

月山ぐわつさんにはだらに雪の残れるを三人みたりふりさけ心こころ樂たのしも

黒々くろくろとしてつづきたる森の上うへに月山ぐわつさんの膚斑はだへみに見えそめつ

夕がれひの皿さらにのりたる木布きふ海苔のりは山やまがはの
香かをわれに食くはしむ

死しのごとしづまりかへる沼ぬまありてゆふぐれ空そら
に啼なくほととぎす

ゆふぐれてわれに寄りくるかすかなる蟻あ子を
殺ころしつ山やまの沼ぬまのべに

暮くれれきらぬこの谿たに中なかにとどろきて巖いはをくだく
音ねぞきこゆる

山やまがひの夏のゆふべに立つ風かぜに青あおくさやけき
草くさ々々なびく

夕ゆふ闇やみはほのあかりつつ山のうへにあはあはと
大きおほき月つきいでにけり

腰すでにまがりし父とこの里にひと夜宿りし
 ことしおもほゆ

羊齒の葉のむらがり生ふる小澤にも下り來り
 て心は親し

にぎり飯を持ってこし見ればほほの葉に包まれ
 ながらにほふひととき

湯殿山 七月三十日

朝くらく志津を立ちいで道いそぐ川を渡れば
 しぶきに濡れつ

大井澤わたらむとして岩魚釣りその歸り路の
 山びとに逢ふ

鳴澤なるさばの音聞きながらあまつ日の未だいまのぼらぬ
石ふみわたる

神山かみやまにさしかかりつつ谷川たがはのうへ吹く風に汗あせ
ひえむとす

湯殿山ゆどのやま一の木戸きどなる薬湯くすりゆのあつきを飲のみてい
ろいろ話す

湧いづる谷まの水に水芭蕉みづはせうひいづにひいづゆ
ゆしきまでに

一の木戸いちのきどの笹ささの家に焚火たきびしつつ居り夏の最中もなか
もわが膚はだ寒く

水芭蕉みづはせう生おふるを見れば人いまだ無かりしころ
の草木くさきおもほゆ

雪^{ゆき}谿^{たに}の雪のさかひに山^{やま}草^{くさ}はやうやく萌^もゆるそ
の芽^{かほ}愛^あしも

夏^{なつ}ふけしここに萌^もえでし小^せ草^{くさ}らに間^まもなく雪
は降^ふりつもるべし

ほうほうとけむりだちつつ目^ま交^{なか}に氷^{こほり}の谿^{たに}はい
まだ續^つけり

われ等^らゆく道の向^{むか}ひの雪^{ゆき}谿^{たに}に罅^{ひび}入りて居^おり恐^{おそ}
ろしく見^みゆ

山^{やま}道^{みち}は仙^{せん}人^{にん}嶽^{たけ}に差^さし懸^かり牛^{うし}の舌^{した}といふ草^{くさ}など
茂^{しげ}る

ここにしてわが立つ湯殿の山^{やま}谷^{だに}は朝^あ日が嶽^{たけ}の
谷^やとむかへり

三人みたりしていこへる山のいただきに吹く風強し
なびく山草やまぐさ

雪谿ゆきだにをわたりつつ居り底に鳴る音をし聞けば
雪解ゆきげのおとぞ

黙もだしてくださる
むらぎもの心畏おそれずここしここし湯殿ゆどのの谿たにを

わが父も母もなかりし頃よりぞ湯殿ゆどののやまに
湯は湧きたまふ

谷ぞこに湧きいづる湯に神かみいまし吾われの一世ひとよも
神のまにまに

鐵かねいろに赭あかく湧きづる御湯みゆにしてくすしく尊たふと
この谷のそこ

梵^{ほん}字^じ川^{がは}とどろき落つる岸に立ちわれを育^{はぐ}みし
父^{ちち}母^{はは}しぬばゆ

額^{ぬか}伏^ふしてわが居たりける山^{やま}谷^{だに}にみ湯のとどろ
く音ぞきこゆる

この吾を護^{まも}り給はなあはれあはれ父母^{ちち はは}のため
をさなごのため

月山 七月三十日

高^{たか}山^{やま}をのぼりてゆけば山の上にほふ草あり
かなしとおもふ

月^{ぐわつ}山^{さん}の山のなだりに雪げむり日ねもす立ちて
そのいつくしさ

谷々を見おろしながら行けれども月讀のやま
 いまだ遠しも

あまつ日はひととき見えてしかすがに白々と
 して笠をかかむる

さ霧たつ月讀の山のいただきに神ををろがむ
 草鞋をぬぎて

吹く風はさ霧をおくり行きがたし眼鏡はづし
 て走りてくだる

ひさかたのさ霧に濡れてひたぶるに月山の道
 くだりくだりぬ

岩道のこごしき道をくだらむと遠山河も見
 こともなし

月山をくだりくだればやうやくにさ霧の雨に
逢ふこともなし

笹小屋にひととき入りていこふなべ笹竹の子
の長きを食ひぬ

味噌汁に笹竹の子を入れたるをあな珍らあな
難有と云ひつつ居たり

小屋の外はまだ強き風ふきやまず身ぶるひを
する現身三人

道すがら宿らむとして幾たびか笹小屋のぞき
つひに宿らず

ひたぶるにくだりくだりて羽黒山森は見ゆれ
ど遠くもあるか

あるところに高山たかやまの草やしな養へる園がありたり臥ふして見入りつ

月山のいただきにこよひ寝ねたらば好よかりし
ならむと吾等おもはず

なせならば振返り見る月山のいただきに雲の
亂れてをれば

一合め一合めと吾われら下りつつなほもはるけし
羽黒の山は

眼まなしたに羽黒の森は見えぬれど行ゆき著つきがたし
共に疲れぬ

峠にてほとほと疲れ心こころ太とろみたりは食くひぬ腹はらふ
くるるに

ゆふ闇におびただしき蚊のいで来るを怪しみ
ながら羽黒にむかふ

懐中燈にて道照らしつつ行きゆくに大き月い
で羽黒を照らす

羽黒やま手向のむらの入口に動けぬまでに疲
れはてつる

羽黒 七月三十一日

やどりたる隣りの部屋に教員と役人とふたり
なかなか寝ねす

朝まだきに眼ざめしかどもわが足の痛みのま
にま立ちても行かず

朝がれひ旨うまらに食くへど足たいたし諸もろ足あしいたしか
がみがたしも

しづかなる羽黒の山や杉のまの石いしの階きざはしを匍なひ
つつのぼる

神かみいます羽黒の山にのぼり来てわが身みは清すがし
汗あせをさまりぬ

年としふりし杉の木こ立たちの木こ下したやみ家いでてより吾
は遙とほけし

やうやくに年老いむとして吾は來ぬ湯殿やま
羽黒やま月讀のやま

戀こひみちのくの出いで羽はのくにに三山みつやまはふるさとの山
しくもあるか

歸路 七月三十一日

最上川水嵩みかさまされどしかすがに山がはのごと
おもほゆるかも

心和のどにのびのびとして見はるかす鳥海山てうかいさんは晴
れ月山ぐわつさんくもる

東風ひがしかぜふきつつつ今日けふ一日ひとひ最上川に白き逆さか
浪なみたつも

海うみにちかづく最上川とし思ほえどいまだ鋭すどき
流ながれたもてり

新庄に汽車とまるまもなつかしき此國びとの
おほどかのこゑ

出羽三山

立つ雲もなし
いつしかも月の光はさし居りてこの谷間より

みちのくの湯殿の山に八月のこほれる谿をわたりつつゆく

常ならぬものにもあるか月山のうへにけむりをあげて雪とくる見ゆ

わが父がわれを導きこの山にのぼりしころは腰まがり居き

をさなくてここに來りしこともへばわれの命も年ふりにけり

うつせみの願ねがひをもてば息いきづきて山の谿底たにそこに下おりきたりける

最上平野を過ぐ

ひむがしの藏王ざわうを越ゆる疾ときかせは昨日きのふも今日けふも断ふゆることなし

草むら

七月しちがつのつよき光のさしそめし草むらなかに草刈らむとす

夜半よなはすぎに起きてをさなごの遊ぶこゑ何か足らへるこゑの聞こゆる

ひとりして机のまへにゐるときもわが體からだより
あぶら汗いづ

さすたけの君がなさは信濃路の高山たかやまの蕨わづらけ
ふぞ持てこし

秋になりし濠ほりに何千なんせんといふ魚族うろくづしろく浮きあ
がりけり

飛行機のうへよりとりし山脈やまなみの寫眞は寂さびしけ
ふも我が見つ

家に飼ふ小鳥いくつもまぢかくの墓地の林はやしに
住みて居りとふ

絶間なきものの響やわれひとり野分のわかだつ庭に
いで來きたりける

飛行機のうへより見ゆる佐渡が島のその寫眞
をも吾は愛せり

夜もすがらたまゆらも眠りがたしとて吾にむ
かへる勞働人ひとり

馬場先の青々とせし濠のみづ鶉の來てくぐる
ことぞさびしき

歌會

長塚節忌

二月十一日
於松秀寺

身まかりし君の年よりも十あまり吾の齡は多
くなりたり

島木赤彦忌

三月二十五日於松秀寺

木の芽だつ春のゆふべとなりぬれば心しづかにわれひとり居らな

仙臺アララギ歌會

五月十九日於木町通蝶花堂

旅を來し一人ごころに松島の瑞巖寺にて砂の道踏む

正岡子規二十七回忌歌會

九月三十日於田端大龍寺

うつせみは寂しきゆゑにたづさはり君にすがらむ世にし亡しとも

折々の歌

あかつきに小芋こいもを入れて煮る汁の府中ふちゆうの味噌
は君がたまもの

もの冷ゆるころとはなりて朝々あさあさの薄明うすあかりより鳥
は群れ立つ

獨逸書のこまかき文字は夜ふけて見む競きほひなし
老いそめにけり

たちまちにいきどほりたる穉兒ちまたごの投げし茶碗
は壘を飛びぬ

いのちせまりて子規の書きける俳諧をけふ三みつ
越こに吾も来て見つ

人だかりの後ろよりわれのびあがり正岡子規
が遺物見にけり

たまたまは頭かしらいためど直ぐ癒いえて身に病やまひなく
起おき臥ふすわれは

秋日さす都會の道にわれおもふ一いつ國こくのことは
豈たはやすからず

わが庭の草をなびけて暑ぐるしく野の分わけの風は
日ねもす吹きぬ

夕飯ゆふいひに鰻うなぎも食へどゆとりなき一日ひとひ一日ひとひは暮れ
ゆきにけり

心こめし西洋せいやうの學がくの系統もすでにもの憂うれし秋
の夜ごろは

つらなめて目のまへを行く群集の心おごりを
われ旁かたわら看かんす

をととのしの秋にととのへし齒はなりしが石いしかみ
しより痛むあはれさ

毬たいながらけふおくりこし吉備きびの栗秋くりあきふけゆか
む山やましぬべとぞ

奉 祝

アララギはかすかなりとも言ことあげて新大君にほおほきみに
つかへまつらく

もろともに生あれこしわれ等あらた代の大君の
へに空むなしくいきじ

冬

飛行機の飛ばざるこよひつれだちて雁のゆく
こそ寂しかりけれ

いらだたしき電話の鈴のひびき來ぬ夜半のひ
ととき心たのしむ

利根川を幾むらがりへのぼりくる鰻の子をぞ
ともに養ふ

とし二つになれるをさなご著ぶくれてわが
る前を幾度にても走る

よき人といやしき人の闘ひを吾は見にけりめ
づらしからず

櫻田門われいでくれば御濠なる青きさざなみ
は限かぎりしらえず

ぬばたまのこの一夜ひとよだに病院のことを忘れて
山にねむらな

郊外の病院に来て一夜ひとよ寝ぬなべての土つちの冷え
わたるころ

籠 喪

十一月十七日、父紀一身まかりたまふ、行年六十八歳、法號專修
院紀阿一道清居士、淺草柴崎町日輪寺に葬る。

わが父を永久とこほにおくりてみだれたる心しづめ
む宵よひのひととき

しづかなる死にもあるかいそがしき劇しき一代おもひづるに

かぞふれば明治二十九年われ十五歳父三十六歳父斯く若し

休みなき一代のさまを諱れに労働蟻といひしおもほゆ

身みづからこの學のため西方の國に渡り二たび渡りき

働きて一代を過ぎしわが父をひたにぞおもふ一家寄りつつ

今ゆのち子らも孫も元祖 Begründer と稱へ行かなむ

しかすがに子孫のために買はざるは美田のみ
と豈おもはめや

おもひ出づる三十年の建設が一夜に燃えてた
だ虚しかり

目の當り目の當りと年を経たるからほのぼの
とせる悲しみもなし

雑歌

兩角喜重氏南米移民状態視察のため文部省より派遣、一首はなむ
けす。五月十七日

みすすかる信濃のをのこすごやかにアマゾン
河に小便して來

海外の同胞に (雜誌植民のため)

海外かいがいにわれ居りしこともありしゆゑ無理むりした
まふなとぞ書きて送らむ

秩父宮御成婚を祝ぎたてまつる。九月廿八日(東京朝日新聞)

國くにこぞりよろこぶけふを吾われと妻つまも一つごころ
に祝いわぎたてまつる

大嘗祭 十一月十四日(東京日日新聞)

悠ゆ紀き主す基きの田たゐのみのみりをあまてらすすめ大おほ
神かみときときこしをします

祭りますすみ庭のかがりいろ澄みて神代ながら
の夜は明けむとす

御大典奉祝歌

奉祝歌 其一 (青年)

ひんがしの日の本づくに統べたまふわが大君
はかしこきろかも

高御座のぼらせたまふ我大王を世界こそりて
ことほぐらしき

高山の木々のことごとく大海の浪のことごとく大
君を祝ぐ

陸くわがより砲ぱうのとどろきわたつみに砲ぱうのとどろき
祝ほぎのとどろき

奉祝歌 其二 (東京日日新聞)

高たか御み座くら高たかしりたまふ大君はとよさかのぼる光
のごとし

あまてらすけふの生い日ひに御たからのやまとだ
ましひに障さやあらずな

奉祝歌 其三 (報知新聞)

十し一も月つきの十と日かのいく日ひ國くに土つちをゆるがしたてる
よろこびのこゑ

あかねさす日のもとつ國の大君を世はこぞり
つつことほぎ讃ふ

わが守る勤務しあれば家ごもり時の間さへや
ことほぎにける

國民のよろこぶこゑは陸よりわたつ海より天
つ空より

菊の花咲きのさかりを御民らは園に集ひてこ
とほぎやます

奉祝歌 其四 (令女界)

く祝がざらめやも
いやしかる御民のわれも酒のみて大臣のごと

北きたのみ民たみみなみのみ民たみけふの生いく日ひけふの足たる日ひ
を祝ほぎたてまつる

高たか御座ごくらのぼらせたまふ吾わが大おほ王きみあふぎまつれば
尊たかくもあるか

ことさへぐ西にしくにぶりのともがらもほぎたて
まつるけふのいく日ひに

國くにこぞりひとつごころにことほぐやみ空そらゆる
がしこゑこそひびけ

をとこをみな老おいも若わかきもをさなごも一つごこ
ろにほぎまつるなり

たかみくらけふはのぼらすわご大おほ君きみいよよ新あたら
しき國くに統すべたまふ

奉祝歌 其五 (同仁)

大いなる白菊の花ひむがしの聖王のくにの白菊のはな

新世あらたよをしろしめし給ふ大王おほきみのみまへににほふ菊のたまはな

九重ここのへの御園みその生ふにしてあな尊たみと黄菊きく白菊しらぎく咲きみ
てりけり

○

備後より都にのぼり來し友としみじみ話すいとまさへなし

原村に病院を復興し、昭和二年五月から青山脳病院長になつた。私は病院の復興に精根をつくしたけれども、辛うじて作歌をつづけることが出来、生活の足しに雑文をも草し、安居會にも出席し、講演にも出かけた。さうしてその間、大正十五年三月廿七日島木赤彦氏が歿し、昭和三年十一月十七日養父紀一が歿した。

赤彦氏歿後、岡麓・中村憲吉・土屋文明の諸氏と共にアララギ發行に骨折つた。作歌は本業に力を致したがために、飛躍は無かつたが、西洋で作つたもののやうな、日記の域から脱することが出来た。

○

焼あとにわれは立ちたり日は暮れていのりも絶えし

空しさのはて

ゆふぐれはものの音もなし焼けはててくるぐると横

たはるむなしさ

かへりこし家にあかつきのちやぶ臺に火焰の香する

澤庵を食む

家いでてわれは來しとき澁谷川に卵のからがながれ

居にけり

うつしみの吾がなかにあるくるしみは白ひげとなり

てあらはるるなり

×

ひとりこもれば何ごとにもあきらめて胡座をかけり
 夜ふけにつつ
 娑婆苦より彼岸をねがふうつしみは山のなかにも居
 りにけむもの
 かりがねは遠くの空を鳴きゆけり夜ふけし家にな
 しむときに

火難後艱難の生活をしたときに、かういふ歌をも作つたのであつた。その
 當時のいはゆる破調の歌なども交じつて居るし、『火焰の香する澤庵』の歌な
 どは、苦しいなかにかういふ客觀的表現をも敢てしたのであつた。澁谷川に
 流れる卵の殻の歌は古泉千樫も褒めたし、『白ひげとなりてあらはるるなり』
 の歌は、島木赤彦も褒めてくれたりしたものであつた。併し全體として、『悲

しい歌』ばかりである。『娑婆苦より彼岸をねがふ』の歌は、芥川龍之介氏が
 私に會ふたびごとに、この歌のことを話した。

かなしかる願をもちて人あゆむ黒澤口のみちのほそ

さよ

さ夜ふけて慈悲心鳥のこゑ聞けば光にむかふこゑな
 らなくに

歸京した年に、島木赤彦と共に、木曾に遊んだときに出來た歌の二つであ
 る。歐羅巴から歸つて來て、また日本の風光に接したときの感慨がいくらか
 出て居るのであつた。

空海のまだ若かりし像を見てわれ去りかねき今のう
 つつに